高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

PipeLine

39
2012.4

特集

初年次科目

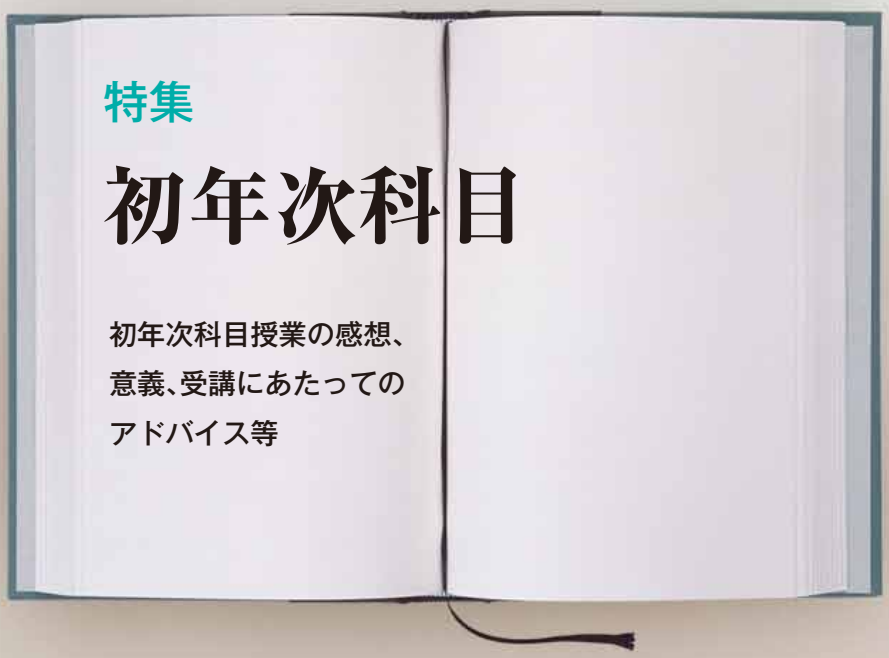
初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等

No.39 Contents

特集「初年次科目」 P1~8

共通教育における
授業改善・教育力向上の取り組みについて P9～10

News
電子化された「パイプライン」を読んで下さい P11



特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、
意義、受講にあたっての
アドバイス等

初年次科目

「共通教育科目」には、「初年次科目」「教養科目」「共通専門科目」があります。今号ではその内の「初年次科目」を取り上げます。これは、入学後すぐに高校以前の学びの転換を図り、自分で考え行動できる力、他者とコミュニケーションできる力、表現できる力などを修得するものです。

「初年次科目」は、「何をなぜどのように学ぶのか」を学ぶ「大学基礎論」、専攻する学問の輪郭を学ぶ「学問基礎論」、「大学英語入門」「英会話」、「情報処理」、課題探求及び解決能力を身に付ける「課題探求実践セミナー」という必修科目から構成されています。

Part I 学生記者から

人文学部
社会経済学科
２年生
黒原　和嘉菜

「地域協働入門Ⅱ」を受講して

私はこの講義で視野を広げることができたとともに、多くの発見と成長をすることができた。

日曜市・帯屋町・西土佐中組での実習によって、深刻な高齢化に伴う後継者不足問題、自転車の違法運転によるアーケード内の危険性、田舎の自然の美しさや人の絆など、多くの魅力や課題を発見できた。これは、机の上での勉強では決して経験できないことであり、この講義の最大の魅力である。また、実習後に振り返り学習を行い、仲間との意見交換で出たものをまとめることで、より考えを深めることができた。特に西土佐中組の人たちとの実習は、私が今まで経験したことがないことばかりであった。西土佐中組で民泊し、農作業や豆腐作りなどの共同作業を行うことで、地域の人たちと直に触れ合うことができた。

地域活性化に興味がある人には是非この講義を受講してもらいたい。「地域協働入門Ⅱ」は、やる気があればあるほど得られるものが大きい内容だと思う。通年といっても月１回程度の実習で、回数は限られている。１つ１つの実習を積極的に行えば、より充実した１年を送ることができるはずだ。

人文学部
社会経済学科
３年生
小谷　美幸

小さなきっかけから大きな経験へ

私は１年次に「地域協働入門Ⅰ」を履修し、自分自身を成長させることができたと感じています。

「地域協働入門Ⅰ」の授業では、実際に高知の嶺北地域へ足を運び、高知の林業の現状について学びました。林業は今、労働条件が悪いことからくる後継者不足や、国産材の需要低下によって木材が適正な価格で売買されていないなどの多くの問題が発生しています。林業が衰退することによって、山を管理する人が減少してしまい、整備されていない「荒廃した森」となっているのです。

この林業の現状を見て、間伐がされた「健康な森」にするためには国産材の需要を高めることが重要だと考え、私達はM.T.M.Sという団体をつくり、間伐材を活かした商品づくりの

活動を始めました。現在、嶺北にある合同会社「ぼうむ」さんの協力を得て、木材の良さを実感してもらえるようなグッズデザインを考え、販売していこうと活動しています。

この授業を通して、地域に対して私達大学生は何ができるのかと考え行動できるようになったので、「地域協働入門Ⅰ」は私にとって良い経験の場となりました。

教育学部
学校教育教員養成課程
障害児教育コース
４年生
蠣田　梨菜

「情報処理」

「初年次科目」である「情報処理」は、大学に入学して以降レポートや授業、研究発表などで本格的に使用していくであろうパソコンの基礎や様々な機能の使い方を丁寧に教えてくれたので、とてもためになりました。

私は自分のパソコンが生協で購入したパソコンではなく持ち込みのパソコンであったので、初期設定やウイルスソフト、大学でのネットの使用方法など、パソコンを使っていく上で不安な点が多々ありました。しかし、この「情報処理」の授業では、ウイルスソフトを入れたり、学校でのネットのつなぎ方などを教えてくれ、主要教員の他に学生のサポート役の方が２名いたので、分からない所はすぐに聞くことができ、授業においていかれる心配もありませんでした。WordやExcelの使い方などや、タイピングの練習などもあったので、パソコンスキルを磨くことができました。

教育学部
学校教育教員養成課程
障害児教育コース
４年生
蒲原　佐和

「英会話」

「英会話」では、授業開始前に簡単なグループトークのテストが行われます。テストでは、学籍番号によってグループが分けられており、そのグループで話題に沿って会話をします。そのテストによってクラス編成が行われ、後日クラスが発表されます。そのクラスには、学校教育教員養成課程の学生だけでなく、生涯教育課程の学生もおり、英語で会話をするという活動を通して、友だちの輪も広がります。

授業の内容は、基本的にはペアを組んで英語で会話をすることが多いです。けれどもこの授業の良い所は、ただ単にペアを組んで英語を話すだけではなく、英語で会話をすることが楽しくなるように、体を動かしながら英語の歌を歌ったり、簡単なゲームを行ったりもするところです。これらの英語活動を続けることで、簡単な日常会話や文法を楽しく身につけることができます。さらに、英語が苦手な人でも、自分のレベルに合ったクラスで学習することができるところもこの授業の良い所だと思います。

理学部
応用理学科
応用化学コース
４年生
林　克紀

「初年次科目」について感じていること

「初年次科目」の授業科目には様々なものがあるが、これはすべて“学び”の基礎を作るきっかけとなり、どれも大学で勉強するにあたり必要なものばかりであったと私は感じている。

たとえば「学問基礎論」は、学びの基礎を作るだけでなく、高知大学ではどのような取り組みをしているのか、先生方がどのような研究をされているのかを知ることができ、いわゆる“専門の授業の学び”のきっかけを作ってくれる授業であった。この授業から、これから自分自身が何について学び、どのような勉強をしていきたいのかを考えさせてくれる科目であったと言える。

また、「大学英語入門」という科目がある。高校まで学んでいた英語だが、理学部で専門授業になると高校以上に英語が必要となってくる。現に私も、研究するにあたり英語の論文を読んで勉強している。そのために、英語力はこれまで以上に必要となってくる。この授業では、自分のレベルにあったクラス分けがなされる。そのクラスで授業を受けることで、しっかりと英語の基礎を復習することができた。

先に述べたように、「初年次科目」では大学の授業を受けていくための基盤を作ってくれる。目的を持って専門的な授業に取り組んでいくための準備が、この「初年次科目」にはあると私は考える。

理学部
応用理学科
応用化学コース
2012年 卒
岡本　郁也

「初年次科目」で学んだこと

「初年次科目」では、「英会話」と「大学英語入門」の講義で英語の特性や文法を学び、「情報処理」の講義でパソコンを用いた情報知識や技能を高めることができました。その中でも、最も私の印象に残っている講義は「大学基礎論」です。この講義で4つのプロセスを学ぶことができました。

1つ目は、大学で学ぶことの意義と目的を理解し、学びのモチベーションを高めて「教わる」から「学びとる」への学びの姿勢の転換を図ることができました。

2つ目は、卒業後の自分の将来像についての意識を持ち、キャリアデザイン、ライフデザインの重要性を認識することができました。

3つ目は、大学での学問や知識と社会との関連に気づき、高知大学生としての自覚を持つことができました。

4つ目は、グループ・ワーク（演習）を通じて、相手の話をよく聞いて理解し、自分の考えを分かり易く伝えるという基本的双方向コミュニケーション能力を身につけることができました。

これは1→2→3→4と連動して学ぶことができたので、大学でしか学ぶことができない大切な講義だと思います。

大学院
総合人間自然科学研究科
農学専攻
政次　直樹

「初年次科目」について

初年次の農学部生は他学部生と違い、担当の先生方や専門授業との関わりが比較的うすい朝倉キャンパスで生活します。授業は一般教養科目が主体で、若干の肩透かしをくらったように感じるかもしれません。このような状況で後期には２年次以降のコース選択を強いられますが、今思うと妥当な判断を下すための情報が得にくい状況だったなと思います。

さて「初年次科目」と言えば、私が学部に入った年度では「大学学」というものがありました（今は「大学基礎論」？）。この授業では、農学部から先生が来られ直接関わりを持てたり、学生が農学部キャンパスに行くこともあります。つまり私たち農学部の学生にとって、将来を決定する重要な選択をする上で、非常に大きなウェートを占める授業でした。私はその時関わった先生の影響で、誤った情報に左右されず流域環境工学コースを選択し、今ではとても満足しています。将来につながる大切な「きっかけ」をつかめるという理由からも、農学部のみなさんは「初年次科目」をとくに大切にしてほしいと思います。

農学部
農学科
流域環境工学コース
３年生
井上　護熙

「初年次科目」について

「初年次科目」で私の印象に残っている科目は「英会話」と「大学基礎論」です。「英会話」は、高校までの授業とは大きく異なり、講義はほぼ英語で進行していき、また私を受けもって下さった先生はネイティブの方でした。初めて講義を受けた時は、あまり英語が聞き取れず一体どうなるのだろうと不安になりましたが、次第に先生の発音はもちろん、表情や手ぶりから先生が何を言っているのかが伝わるようになり、後半では楽しく授業を受けることができました。

次に「大学基礎論」は、農学部の学生が班に分けられて、それぞれの班は与えられた課題について発表を行うという内容なのですが、私はその中で班の人たちと意見を交わしていくうちに、また他班の発表を聴くうちに、同じ学部でも様々な考えをもった人がいることを感じることができました。

ここに紹介した科目は二つだけですが、他の科目も新鮮なものばかりで、良い経験ができたと感じています。

医学部
医学科
２年生
大櫛　萌子

「初年次科目」で学んだこと

「初年次科目」とは、少人数グループでの議論を通して医学という学問に取り組む姿勢や態度を学ぶ科目だと思います。

最初の授業で、これから一緒に活動するグループに振り分けられたのですが、医学科にはいろいろな経験を持った様々な年齢層の同級生がいることを知って驚きました。特に一度社会に出てから再入学された方の経験談はとても興味深く、良い勉強になりました。討論をすることによって自分とは違う考えの人とふれあい、その中で医学に対してどう向き合っていくべきかを考えることができるよい機会だったと思います。

また、ケーススタディでは、正解の無い問題について議論することでメンバーの意外な側面を発見したり、各自で下調べをすることによって、現実に行われている医療に今どんな問題が起きているのか深く知ることができました。

「初年次科目」によって、自分がいったいどんな医師になろうとしているのか見つめ直し、上級学年に進むにあたって目標をはっきりさせることができたと感じています。

医学部
看護学科
２年生
ハオ　エマヌエル

「学問基礎論」について

「学問基礎論」は、高知出身で大阪の病院で長く勤務されていた優しい坂本先生が独特の関西弁で教えて下さる。入学して最初に生活援助と並び、「看護」とは何かを患者の観点から専門的に見ていく。看護という「プロフェッショナル」として求められる、相手を尊重し理解できる能力を身に着けるために大切な講義である。

講義は、積極的に学生を無作為に指名し意見や答えを求められる。学生は、ドキドキしながらも自分の言葉で自分の思いや考えを述べ、聞いている私達も「あぁそんな考えがあるのか」と気付かされることも多々ある。グループワークも複数取り入れており、他の学生を知り仲良くなれる機会にもなっている。グループ内で自分の役割を見つけ「協働する」ことを大いに学ぶことができる。坂本先生のトークもおもしろく、講義中に学生が笑う場面も多々ある。

覚えなければならない知識もたくさんあり、グループワークで考察する内容が多岐に渡り大変なことがあるが、看護職へのスタートラインとしてたくさんのことを学ぶことのできる楽しい講義であった。

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、
意義、受講にあたってのアドバイス等

Part Ⅱ 教員から

人文学部
高橋　俊

初年次教育雑感

私の日本語ソフトはATOK14（2001年発売）ですが、「初年次教育」と打とうとしたら「初年自供幾」と変換されてしまいました。初年次教育は、それぐらい新しいプログラムです。

2007年に設立された初年次教育学会の「設立趣意書」には、日本における初年次教育導入の目的として、「入学した学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功に水路づける」ことが挙げられています（学会HPより）。また、中教審の「学士課程教育の構築に向けて」という答申では、初年次教育を「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と規定しています。なんだか「補習」的な、「遅れている学生をまっとうにするために」的な臭いがします。実際、「最近の大学生は子どもだ」「レベルも低くなっている」という声はよく聞かれるし、「だから初年次教育が必要なんだ」という論理で初年次教育の必要性を訴える人も多いように思います。

しかし私は、初年次教育を、プラスの方向で考えています。すなわち、「〈意味〉を考える」こと。

初年次教育のプログラムは様々です。「レポートの書き方」のような技術的なものもあれば、グループワークタイプのものもあります。が、一つ、理念として重要なのは、「〈意味〉を考える」ことではないかと思っています。勉強にしろ、労働にしろ、自分はどういう意味づけで、何のために、それを行うのかを考えること。ゆえに私は、「レポートの書き方」においても、まずは「レポートを書いて何の役に立つの？」というメタ問題から始めるようにしています（私の趣味もありますが）。

こういう問題は、私の学生時代には考えもされませんでした。手前ミソも甚だしいですが、私は初年次教育の授業をしていて、「自分の学生時代に、こういう授業があったら、考え方がもっと広がったのになあ」と思うことが少なくありません。自分が学生時代には存在しなかった初年次教育のプログラム構築に立ち会えていることに、幸せを感じているところです。

教育学部
是永　かな子

「学問基礎論」で何を行ったのか

私が担当した「学問基礎論」では、「大学で学問を専門的に学ぶ際の基礎になる知的好奇心とそれを実現するための読書力、文章表現力、発表力をつけること」を共通目標としていた。そのために前半は教育学部の学校教育教員養成コースの5名の教員が導入的講義を一回ずつ行い、後半は受講生が各教員の開く専門分野のセミナーに分かれ、上記の課題の育成を目指す内容とした。

前半の導入的講義の内容は、担当教員の専門分野が一定反映されたため「比較文化-自分を見つめよう」「英語と現在」「歴史と時間」「地域問題を考える」と私が担当した「障害を考える」とテーマ設定が多様であった。学生はこれらのオムニバス講義受講後に指導を受けたい教員を選んだ。グループ分けが行われ、それぞれ20人前後の集団で後半のセミナーを行うこととなった。私が担当した後半部分の専門分野セミナーでは、障害を含めた教育の時事問題について文献を読み、その内容をゼミ形式の授業内で報告し、討論しながら理解を深めることを目標とした。20人で同じ文献を読み、個人のみならず集団議論によって内容を理解することを目指したのである。

共通講読文献は、佐藤学(1999)『教育改革をデザインする』岩波書店であり、障害のみならず通常教育の文脈を意識して障害のある子どもの事項も議論するように心がけた。内容は毎回4人くらいのグループの報告者がレポートにまとめ、報告し、その後全員討議とした。発表者のレジュメは「A4一枚」程度として、三分の二が概要、三分の一が論点の提示を記述するようにした。端的にレポートをまとめることと、何を議論したいかを意識して文献を読む課題を意識したのである。

以上の活動を通して、大学で教育を学ぶ上での「基礎的な能力」を身に付けて欲しかったのである。最初は、共同作業やレポートのまとめ方、論点の提示、集団での議論に戸惑っている様子も見られたが、徐々に教員からの促しがなくとも活動が成立し、15回の講義の中でも学生の成長を感じることができた講義であった。

理学部
村上　英記

初年次科目「大学基礎論」

初年次教育が日本中の大学で導入されています。アメリカでは1970年代後半から、入学生を大学教育に適応させ中退などを防ぎ、成功に導くための有効な教育プログラムとして導入されてきました。日本でも平成20年に初年次教育学会が設立され、導入する大学が増えました。

高知大学では平成20年度より3つの初年次科目、「大学基礎論」、「課題探求実践セミナー」、「学問基礎論」が開講されています。その役割として、「学びの転換」、「学びの見通し」、「学問的関心」、「社会的関心」、「協働への関心」が挙げられています。

「大学基礎論」では「学びの見通し(自己評価力)」に重点を置いています。「本当の学習は、学習者が振り返る時に始まる」という考えに基づき、講演と演習(振り返り)を通して卒業後のありたい姿を想像し、何をどのように学ぶのかを自ら考えてもらおうとしています。

講演では、教員・外部講師(企業や教育委員会の方)による大学の役割や社会との関わり、職業や職業と社会の関わりを講演してもらいます。このような話を集中して聞くことは、これまでなかったのではないでしょうか。

演習では、講演内容を振り返り議論を通して考えを深めてゆきます。しかし、40数名のクラス全体で話をするといっても、マイケル・サンデルのようにはいきません。大抵は、「…」、「分りません」で終わります。私の担当したクラスでは、数名のグループ単位で作業をしながら議論をしてもらいました。「議論の見える化」と呼んでいますが付箋紙や模造紙を使って言葉を図化してゆきます。ここでのプロセスは、「問題発見(テーマ探し)」、「正解のない問題に対するよりよい解答の模索(議論)」と科学のプロセスそのものです。

作品の一部を授業のHomepageで公開しています。カラフルではあるけれど、内容の稚拙なものもあります。かつての受講生がこれを見て自らの成長を実感するような大学生活を送ってくれていると良いのですが。

農学部
齋　幸治

「初年次科目」について

「大学に入れば専門的な授業ばっかりだろうな」と想像していた人は、入学後、教養教育が主となる「共通教育科目」が時間割にずらっと並ぶことに少し肩透かしをくらったような感覚になったかもしれません。たしかに大学は、教育機関であるとともに研究機関でもあるために、高度・専門的な知識の習得の場として認知されています。しかし、本当に専門知識・スキルを習得することだけが大学生の目的でしょうか。ここではとくに、全学での必修科目となる「初年次科目」の意義について、考えてみましょう。

みなさんは「大学」に何を期待しますか？上述のような高度な知識・スキルの習得を目的とする人や、社会へ出るまでの準備と捉える人もいるでしょう。あるいは周りのみんなに合わせて進学…といった少し消極的な動機で入学した人もいるかもしれません。いずれにせよ、進学の目的は十人十色、その分みなさんが大学に求めるものも千差万別だと思います。

そんな様々な目的・要求を持つ全員が、なぜ同じ授業を受けなければならないの？という疑問がうかびませんか。この疑問の答えが、「初年次科目」の意義だと思います。つまり、「様々な分野における高度な専門知識・スキルを習得した人（大学を卒業した人）が、全員共通して身につけておかなければならないこと」を学ぶ、あるいは考えるきっかけを得るための授業が「初年次科目」だと思うのです。

履修案内や大学公式の文書の中で、「初年次科目」も含めた「共通教育科目」は「自律的人材の育成」のためと位置付けられています。つまりは、社会の中で自分の持っている知識・スキルを最大限有効に発揮できる人になろう！ということです。貴重な青春時代を費やした大学での経験を、宝の持ち腐れにしてはもったいないと思いませんか。

大学での学びは、充実した人生を目指す修行のようなものだと思います。修行と言うからには、その目的意識を持つと持たないとでは、成果は雲泥の差となります。「初年次科目」に限らず、いずれの授業においても「授業の意味」を意識しながら、単位を修得していって欲しいと願っています。

医学部
栗原　幸男

看護学科における初年次教育の概要

看護師の主要な役割は患者さんができるだけ早く回復するためにどのような医療上および看護上の支援が必要か、患者さんとのコミュニケーション、患者さんの観察、他の医療職との協働により、見出し、それを提供することである。このような看護師を育成するためには、まずひとをよく理解し、患者さんとの関係を築き、信頼できる情報を得られるためにコミュニケーション能力が極めて重要である。また、沢山の情報を集めて、それを整理し、問題点を見出し、その解決策を考える能力、つまり問題解決能力が必要である。

そのため看護学科の初年次教育では、患者さんと接する機会を入学後早い段階から持てるように、4月に外来付添実習を行い、2月に3日間の病棟実習を行っている。その間にも、医療現場を理解するために、外来や病棟の様々な部署の見学実習を行っている。ひとの理解とコミュケーション能力の育成という点では、必修科目として「社会学」、「生命倫理」、「コミュニケーション論」を配置し、更に人文学部のご協力により朝倉キャンパス開講の「哲学」を看護学科学生が優先受講できるようにしている。

問題解決能力については4年間を通じてその育成に取り組んでおり、初年次の「課題探求実践セミナー」に始まり、4年次の卒論まで小グループでの学習を展開している。初年次教育では、「大学基礎論」で「医療人としてのあり方」について、「課題探求実践セミナー」で「ラ

イフサイクルと健康」について、「学問基礎論」で「看護の成り立ち」と「環境と健康との関連」について、小グループ学習中心での学生主体の授業を展開している。小グループ学習にはチュータとして看護学科の教員ほぼ全員が参加し、きめ細かい指導を行っている。

最後に、情報分析能力の育成については、全学共通の「情報処理」に加え、「看護情報論」を必修科目として配置し、看護における情報の役割とその重要性を学ぶと共に、クラス内で収集した健康指標のデータ分析についても小グループで取り組んでいる。

共通教育における授業改善・教育力向上の取り組みについて

平成23年度 共通教育自己点検・自己評価部会長　大石達良

授業改善アクションプランの効果・実施方法

高知大学の共通教育では、今から4年前の2008年度から、授業改善と教育力向上をめざして「授業改善アクションプラン」に取り組んでいます。この取り組みは、教員が授業アンケートなどの結果分析に基づいて、「授業改善プランを作成・提示・実施・検証する」というところに最大の特徴があります。その効果として、以下の4つをあげることができます。

(1)教員の学生・授業に対する分析能力の向上
(2)学生と教員との信頼関係の向上
(3)学生の授業目的再認識、学びの姿勢や意欲の向上、授業評価能力の向上
(4)授業改善を当該授業期間中に行うことにより学生がその期間中に改善利益を享受

また、実施方法については、以下に示したような流れで行われています。

①第5週目頃に授業アンケートなどによって授業の自己分析を実施
②第7週目頃までに授業改善アクションプランを作成し学生にも提示
③授業改善アクションプランを実施
④15週目に授業評価アンケートなどによりアクションプランの効果を検証
⑤最後にこの効果検証アンケートの分析に基づき来年度への課題を考察

授業改善アクションプラン（2008-2010年度）に対する学生・教員の評価

共通教育では、2010年度末に、「第Ⅰ期 教育力向上3カ年計画（2008～2010年度）」の取り組みについて総括を行いました。この取り組みに対する学生からの評価と教員からの評価を見てみましょう。

まず学生側の評価について。15週目アンケートで、教員が作成したアクションプランの授業改善効果に関する回答は、5点満点の3.9点というまずまずの評価でした。また、教員が作成したアクションプランに関連する授業質問項目の評価も、平均値が0.3ポイント上昇していました。

次に教員側の評価について。「授業改善アクションプラン」を実施した教員に対するアンケートで、この取り組みの授業改善効果に関する回答は、「はい」14.9%、「どちらかというとはい」46.5%、「どちらともいえない」25.4%、「どちらかというといいえ」4.4%、「いいえ」8.8%、でした。このように、いずれの側からの評価も、全体として肯定的なものとなっていました。

授業改善アクションプラン(2008-2010年度)に対する外部評価

さらに、2011年2月に、有識者による外部評価を受けました。そこでは、以下のような評価を得ることができました。

〔1〕全国的にも例をみない画期的な取り組みである
〔2〕授業改善・教育力向上の底上げを図る取り組みとして効果的に機能している

ただし同時に、下記のような課題もいただきました。

〔1〕アンケート項目は、高知大学が規定する5つの教育力(※)に基づいたものにすべき
〔2〕アンケート結果の教員へのフィードバックについて丁寧に工夫して行うべき
〔3〕授業評価の高い教員、授業評価の低い教員への個別具体的な支援を考えるべき

2012年度に向けた取り組み

上記のような総括と外部評価を受け、2011年度には、新たな「授業改善アクションプラン」の試行を行いました。そこでは、以下のような新しい試みを行いました。

【1】5週目アンケートに関して、高知大学の5つの教育力に基づいて質問項目を設定
【2】授業改善ポイントを探るために、アンケートだけでなく授業コンサルテーション等を活用

2011年度末現在、その効果を分析し、2012年度の取り組みについて検討を行っているところです。

今年度(2012年度)、共通教育の多くの授業で、このような「授業改善アクションプラン」の取り組みが行われると思います。ただ、良い授業は教員の努力だけでは実現できません。学生の皆さんも、ぜひ、良い授業を作るために心掛けて欲しいと思っています。

(なお『共通教育「授業改善アクションプラン」外部評価報告書』は、共通教育のウェブサイト(https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/kyo2/publication/)に掲載されています)

(※)高知大学の5つの教育力とは、以下のように整理されたものを指します。
①科学と文化の歴史や到達点に裏打ちされた専門的(学問的)な力
②学生の能力(レディネス)やニーズを見抜く力
③教育(授業)の目的と学生の能力に即して分かりやすく教える力
④学生の学ぶ意欲や主体的・自主的な学びを引き出す力
⑤不断に教育・授業改善を自律的に行う力(授業改善力)

自己点検・自己評価部会

「共通教育」の実施は、責任者である主管と各学部の委員とで構成される「共通教育実施機構会議」が行っています。同会議にはいくつかの部会や委員会があり、自己点検・自己評価部会は、「共通教育」の改善のために授業などの点検や評価活動を行っています。

電子化された「パイプライン」を読んで下さい

共通教育実施機構会議広報部会長
玉木　尚之

**広報部会では、大学のホームページ中に
共通教育のページが開設されたのを契機に、共通教育広報誌「パイプライン」の
発行方法・内容を中心に広報の在り方を再検討してきました。
このたび、以下のような改革が実施されることになりましたのでお知らせします。**

完全電子化し紙媒体は廃止

2011年1月に、1年生と3年生を対象に実施した「広報（パイプライン）に係るアンケート」の結果、全学的、とりわけ2年生以上の学生にはほとんど読まれていないことが判明したことから、発行形態と配布方法の改善を行いました。

発行時期は、年度や学期初めのあわただしい時期を避けて、大学行事が一息つくタイミングに変更します。今後は、最新号が発行されると共通教育ホームページ（高知大学サイト内）に掲載し、内容紹介とともにみなさんにEメールでお知らせします。

あわせて、共通教育ホームページも大学のトップページから閲覧しやすい場所に移動します。

バックナンバーの記事ごとに検索ができるようになります

完全電子化に伴う改革の大きな目玉です。共通教育ホームページができて以来、バックナンバーをPDF化して掲示してきましたが、各号ごとに紙媒体と同じように読んでいくことしかできず、その中の記事を検索することはできませんでした。

これからは、「特集記事」や「教養記事」といったカテゴリーごとにバックナンバーの検索が可能になります。記事が蓄積すると、カテゴリーごとの情報源として役立つでしょう。

学生委員会の学生の視点からの記事を充実します（秋号）

共通教育学生委員会のコーナーを秋号に定例化し、学生の視点からの情報を充実させます。記事の編集に携わる委員会に、ぜひ参加して下さい。

特集記事のテーマを共通教育の科目に絞ります（春号）

共通教育の広報誌としての役割を明確化するために、特集記事のテーマを改善します。

今号から春号には、「初年次科目」「教養科目」「共通専門科目」の順に、各学部の学生と教員の記事を載せていきます。記事の蓄積で、科目ごとの受講情報が得られるようになるでしょう。

新たに、科目の分野ごとの記事を掲載します（秋号）

共通教育の授業科目は、教員の組織する「カリキュラム等編成部会」と、そこから各分野ごとに分かれた「〇〇分科会」が授業を編成しています。

次号の秋号より、各分科会からの情報を順番にお届けします。

その他、従来通り、授業改善のための自己点検評価活動やFDの情報を継続していきます。履修案内やシラバス掲載の授業情報を補う情報源としてぜひ読んで活用して下さい。

最新号は
Eメールで
お知らせします

編集後記

大学在学中に多くの教養を身に付けてほしいですね。ぜひ新聞を読む習慣をつけましょう！（K. S.）

「初年次科目」とはどのよう授業科目で、どのような内容か、そしてどのような意義や学びがあるか、わかってもらえましたか？（K. Y.）

高知大学共通教育広報誌 PipeLine［パイプライン］No.39
発　行 / 高知大学共通教育実施機構会議
編　集 / 共通教育実施機構会議広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168（学務課共通教育係）
発行日 / 2012年3月
制　作 / ㈲西村謄写堂
□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail : gm06@kochi-u.ac.jp